

論文紹介 Lingua Vol. 122, Issue 13,
Special Issue on Varieties of Pitch Accent
Systems, Edited by Haruo Kubozono, Elsevier,
October 2012

著者	窪園 晴夫
雑誌名	国語研プロジェクトレビュー
巻	4
号	2
ページ	158-160
発行年	2013-10
URL	http://doi.org/10.15084/00000747

**Lingua Vol. 122, Issue 13,
Special Issue on Varieties of Pitch Accent Systems**

Edited by Haruo Kubozono
Elsevier, October 2012

窪 蘭 晴 夫

この *Lingua* 特集号は 2010 年 12 月に国語研で開催されたプロジェクト主催の国際シンポジウム ISAT 2010 (International Symposium on Accent and Tone) の成果をまとめたものである。シンポジウムの主テーマ (アクセント・トーンの類型) をベースに「ピッチアクセント (言語) とは何か」を論じた 8 本の論文を収録した。「ストレスアクセント言語」や「声調言語」との異同を見据えながら、日本語諸方言、バスク語、ベルシア語、スウェーデン語等の分析をもとに世界の「ピッチアクセント言語」の異同と「アクセント」の類型を論じている。

「ピッチアクセント」という用語は音声研究でもさまざまな意味に用いられているが、ここで問題にしているのは語の特性としての「語アクセント」であり、それが特に高さ (ピッチ) によって実現されるものを指す。そう定義すると話は簡単のように思われるかもしれないが、実際にはそうではない。たとえば日本語東京方言とスウェーデン語はともに「ピッチアクセント」の特徴を持つ言語として有名であるが、両者の性格は大きく異なる。東京方言には無アクセント (平板型、無核、unaccented) と呼ばれるタイプの音韻的卓立を有しない語が存在するが、スウェーデン語にはそのようなタイプの語は存在しない。一方、スウェーデン語のピッチアクセントは tonal accent, lexical tone と呼ばれ、強勢 (stress) を持つ音節が持つ副次的な弁別の特徴である。これは東京方言をはじめとする日本語のピッチアクセントには見られない特徴である。このように同じ「ピッチアクセント」と呼ばれる言語であっても、言語によってその中身は大きく異なる。

また、海外の音声研究者にはあまり知られていないが、日本語という同じ言語の中にもさまざまなピッチアクセント体系が存在している。つまり、言語間においても言語内においても、「ピッチアクセント」の実態は実に多様なのである。その多様さゆえに、「ピッチアクセント」とは何かという疑問が生じる。近年では Larry Hyman のように「ピッチアクセント」という概念そのものに疑問を投げかける研究者も少なくない (Hyman, L.M., 2006. Word-prosodic typology. *Phonology* 23, 225-257.)。本特集は、そのような疑問に答えるために編集されたものである。

本特集は序説と 8 つの論考からなる。以下、その概要を紹介する (カッコ内は執筆者名)。

1. Introduction (Haruo Kubozono)

特集の序論として、pitch accent, stress accent, tone などといった基本概念の定義、pitch

accent の言語間差異と言語内差異, word accent と word tone の区別, 無アクセント語が持つ意味などを解説している。

2. 'Two Basque accentual systems and the notion of pitch-accent language' (José Ignacio Hualde)
バスク語の中に, 東京方言タイプのピッチアクセント体系を持つ方言と, スウェーデン語タイプのピッチアクセント体系を持つ方言があることを指摘し, 両者の史的關係を論じた。
3. 'Culminativity, stress and tone accent in Central Swedish' (Tomas Riad)
スウェーデン語のピッチアクセント体系に関して, これまでゲルマン諸語に提案されてきた分析とは異なる新しい分析を提案している。
4. 'The Persian pitch accent and its retention after the focus' (Vahideh Abolhasanizadeh, Mahmood Bijankhan and Carlos Gussenhoven)
音響実験と知覚実験をもとに, ペルシア語が stress accent ではなく pitch accent の特徴を持つことを示し, その実態を詳細に論じた。
5. 'Varieties of pitch accent systems in Japanese' (Haruo Kubozono)
日本語諸方言が見せるピッチアクセントの多様性を示しながら, その多様性を捉えるために, ピッチが付与される基本単位, ピッチアクセントが実現するドメイン, 複合語アクセント規則などの複数の独立したパラメータが必要であると主張している。
6. 'Three types of accent kernels in Japanese' (Zendo Uwano)
日本語のピッチアクセント体系に, 東京方言のようなピッチ下降が弁別的な体系だけでなく, ピッチ上昇が弁別的に働く体系も存在することを実証した。(詳しくは著者本人による詳細な解説 (『国語研プロジェクトレビュー』 本号 161-163 ページ) を参照)。
7. 'Prosodic typology in Japanese dialects from a cross-linguistic perspective' (Yosuke Igarashi)
日本語のプロソディー体系が文の特性 (イントネーション) によってどのように類型化できるか考察し, その類型仮説を他の言語にも応用することを提唱した。
8. 'Stress in windows: Language typology and factorial typology' (René Kager)
Stress 言語における stress の付与位置に three-syllable window が存在することを示し, 同じ考え方が日本語をはじめとする pitch accent 言語の分析にも有用であることを論じている。
9. 'Deconstructing stress' (Harry van der Hulst)
'accent' や 'stress' といった基本概念の再検討をもとに, 新しいプロソディー体系の類型を提案している。

もとより, この特集号が「ピッチアクセント (言語) とは何か」という根本的な問題をすべて解決したわけではないが, 多様なピッチアクセント体系を同じ土俵上で比較考察した意義は大きいと思われる。この研究を進めていくと, 世界の諸言語から見た日本語 (アクセン

ト)の特性がさらに明確に見えてくるに違いない。同時に、日本語の研究が世界のアクセント研究、プロソディー研究に貢献できる可能性も大きい。日本語はアクセントの宝庫とも言われるほどに多様な方言アクセント体系を持ち、またアクセント研究の歴史も古い。日本語アクセントについてこれまで蓄積したものが、最近明らかになったところを世界の言語学者に知らしめる努力が必要であろう。日本語研究の国際化は日本語そのものの国際化につながるはずである。

窪菌 晴夫 (くぼその・はるお)

国立国語研究所理論・構造研究系教授。Ph.D. (言語学) (エジンバラ大学)。南山大学助教授、大阪外国語大学助教授、神戸大学教授を経て、2010年4月より現職。

主な著書・論文：『*The organization of Japanese prosody*』(くろしお出版、1993)、『語形成と音韻構造』(くろしお出版、1995)、『アクセントの法則』(岩波科学ライブラリー 118、岩波書店、2006)、Word-level vs. sentence-level prosody in Koshikijima Japanese (*The Linguistic Review* 29, 2012)、Varieties of pitch accent systems in Japanese (*Lingua* 122, 2012)。

受賞：市河賞(財団法人語学教育研究所、1995)、金田一京助博士記念賞(金田一京助博士記念会、1997)。

社会活動：日本言語学会常任委員・評議員、日本音声学会理事・企画委員長・評議員、日本学術会議連携会員。